# 非暴力による転換にむけたガンジーとラマチャンドランの「師弟の精神」

V・S・ハリーンドラナーツ
平良 直 訳

## 天の満月のごとき人

偉大なる人物であったラマチャンドラン博士――彼は、後継者たちから憧れをもってGRと呼ばれていました。インドの言語のひとつであるマラヤーラム語で、月のことをチャンドラ（Chandra）あるいはチャンドラ・ママ（Chanda Mama）といいます。ラマチャンドラン博士は我々一人一人にとって、まさに天空に輝く満月のような存在であり、私も含めてすべての人にとってママ（MAMA、おじさん）のような人でもありました。彼は、我々の国にかけがえないものを残してくれました。彼の一生は、二つの世代をつなぐ金の糸でありました。ひとつの世代はインドの独立を勝ち取った世代であり、もうひとつの世代はその勝利の果実を享受する人々の世代です。

ラマチャンドラン博士の思想の根底には、理想主義でありつつ愛国主義的でもあるという、まれな特質があります。彼の師匠に当たる人々には、多くの著名な方がいましたが、マハトマ・ガンジーとタゴールも彼の師でありました。彼は、この二人の伝説的人物によ

って、インドの国民生活の本流の中に引き込まれたのです。それは、祖国にとって極めて重要で決定的な時期でした。二人の師の直接の指導のもと、ラマチャンドラン博士は国家建設の重要な担い手となったのです。

ラマチャンドラン博士の偉大な業績は、理想と行動を融和させたことでした。我々がガンジー主義者の諸原則を考える時、いつも、「言葉」と「行い」の間の分裂についての疑問が浮かびます。ガンジー主義の強烈な信奉者達に出会うことがありますが、彼等の主張が一貫して実践可能であるのだろうかと、私は疑うのです。

私は、ラマチャンドラン博士も、ガンジーから受け継いだ信条に生き抜いた人だと理解しております。ただし、ガンジーの理想に対する博士のまれに見る誠実さと揺るぎない信念というものは、博士が「言ったことを実行するため」の力にほかならなかったのです。

## 「村から始めよ」

ガンジーは、インドを立ち上がらせるための努力は、都市部においてではなく、国家の最も小さい単位である「村落」から始めるべきだと信じておりました。ラマチャンドラン博士によって創設された「ラマチャンドラン民衆福祉財団」の活動は、国家の発展過程で選択すべき青写真であったのです。

この福祉財団は、博士の後継者であるマイティリ氏のリーダーシップのもと、発展してきております。

この財団の目的は極めてユニークで、全ての世代にとっての福祉と発展計画をもとにしております。ここでは児童の育成から老人のための生活まで、全ての局面での発展と福祉が包括的に機能するようになっています。

ガンジー主義に基づいた教育者として、ラマチャンドラン博士の貢献は傑出したものでした。彼は、彼の教育施設で学んだ子供達が国際的な市民になることを望んでいました。我々は、社会の発展に貢献する市民を育成する教育システムが必要だと考えます。今日の教育システムは、特定分野の専門家を育てるためのシステムです。そこで教育された人は、よく働き、多額





の報酬を得ることはできるでしょう。しかし、そのことに、どれほど価値があるのでしょうか。彼らには社会性が欠如している場合が少なくありません。科学技術の発展によって世界は小さくなったはずなのに、彼ら自身、すぐそばの隣人のことさえ、ほとんど知ることがないのです。

ラマチャンドラン博士は「我々の学生は、より高い教育を受ければ受けるほど、より社会に関わっていくべきだ」という確固とした教育観をもっていました。ネヤッティンカラにあるラマチャンドラン・パブリック・スクールなどは、このような教育理念を実行しております。

## 二人の師から学んだもの

私は常に、ラマチャンドラン博士のなかに、ある種の強さを見いだします。彼が抱き続けてきた教えと原理を通して、私はこれまであらゆる失望や不安を乗り越えてきました。私は博士の教えに立ち返り「何も失ってなどいない」ということを理解し、元気を取り戻すのです。

彼は学生のころ、スワミ・ヴィヴェーカーナンダ、そしてマハトマ・ガンジーに魅了されました。ガンジーは一九一九年にはすでに、インドの政治とインド全体の改革において偉大な存在となっていました。カースト制度に対する彼の戦いと、不可触民解放への情熱は、学生達を深く感動させ、奮い立たせました。「ヤング・インディア」紙におけるガンジーの記事や発言は、若い世代を感動させました。若きラマチャンドランも、それに強く惹かれたのです。

高校生のころ、ラマチャンドラン博士はタゴールの詩を学んでいました。若きラマチャンドランは、ある会合でタゴールと会う機会を得たのです。それは啓発的な体験でした。彼は、シャンティニケタンにあるビシュババラティ大学に進学することを決意します。しかし、彼の父親はそれを喜びませんでした。父親は、彼に法律家になってほしいと思っていたのです。最終的には、若きラマチャンドランの決意の固さに、父親もそれを許すことになりました。

ラマチャンドランの人生のモットーである「自由であれ・率直であれ・恐れるな」(Free・Frank・Fearless)は大学時代に育まれました。

大学三年生の時、彼が教わっていた教授が、ガンジーがデリーで二十一日間の断食をする際の世話役を頼まれた時、ラマチャンドランも随伴することになったのです。

断食の十三日目、ラマチャンドランは、ガンジーの夜の祈りの場に同席しました。祈りの部屋では、全てが静寂の中にありました。やせ細ったガンジーを取り囲むように、イスラム教、キリスト教、ヒンズー教徒、シーク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒の指導者達がいました。だれもが完全な静けさのなかで祈りを捧げていました。

その時、何かが若き精神のなかで起こったのです。内なる世界を照らし出す閃光のようなものが生じました。それは、彼の内なる世界に永遠に変化をもたらす出来事だったのです。

ラマチャンドランは、マハトマ・ガンジーに詳細なインタビューを行っています。長い会話の後、ラマチャンドランは大学に帰ります。若い精神は、ガンジーから聞いたことが、タゴールの教えとどの程度補足しあうものなのか、そして根本的な違いはどのような点なのか考えをめぐらしました。

修士課程ではイギリス哲学と社会学を修め、ラマチャンドランはサバルマティのサティアグラハ・アシュラムに、タゴールの手紙を携えて訪ねました。サバルマティで彼は、労働の尊厳を学びました。そこでの彼の最初のレッスンは、衛生設備の仕事と清掃の仕事でした。まもなく彼は糸つむぎを学びました。かれはガンジーの指示に従い、成人教育を行いました。後にラマチャンドラン博士は、全インド・カーディ団体（糸つむぎ協会）の長になったのです。

ラマチャンドラン博士は、シャンティニケタンとサバルマティで得がたい教育を受けたのです。シャンティニケタンでの教育は、彼に知性と文化的体験を授けました。一方、サバルマティでは、内面精神の探究と精神の純化の方途を学んだのです。





## 「非暴力への疑念」を払拭

マハトマ・ガンジーが「塩の不服従運動（サティアグラハ）」をデリーで始めた時、ラマチャンドランはタミールナドで、ラジャゴパァラチャーリの指導のもと、この運動に参加することになりました。そして、運動の指導者として逮捕され、一年以上、牢獄に入れられました。釈放された後も、ガンジーの不服従運動に参加し、再び逮捕され投獄されたのです。

ラマチャンドランは、これらの体験を通して、「非暴力こそが、人生の様々な問題を解決する優れた方法であるばかりか、唯一の方法である」ことを学んだのです。塩のサティアグラハ運動によって、インドの人々は、〝集団的非暴力の抵抗が可能なのか〟という疑問を払拭することができたのです。最も注目すべき進展は、インドの女性達が平和的改革へ参加し、目覚めたことでした。

不服従運動のどのプログラムも、二つの明らかな成果を生み出しました。一つは、英国政府に、この運動を押さえ込むことは高くつくということを分からせたことです。二つ目は、運動に参加する人々だけでなく、それを離れて見ている大多数の大衆を巻き込むことができたということです。不服従運動に賛同する共感の波は、国中に広がりました。塩のサティアグラハの後、非暴力のメッセージはインドの津々浦々にまで広がっていったのです。弱者とされるものたちが強者に勝つ武器こそが、この非暴力運動の中にあったのです。

マハトマ・ガンジーによって非暴力の種がインド全体に蒔かれました。これは世紀の出来事でありました。ガンジーは国家の権力も持ちませんでした。道徳的であることと、優れた精神性が、彼の武器でありました。ガンジーの外面生活の質素さ、そして非暴力運動への一貫した献身だけに目を奪われると、彼の多くの深遠な思索や自制、誠実さや願望が見えなくなってしまうことがあります。彼は聖者であると同時に革命家であり、政治家、改革者であり、また経済学者、宗教者、教育者であり、信仰と理性に身を捧げるサティアグラハの実践者であり、さらに諸宗教の間に立つ人であり、

インドの愛国者にして国際人、行動の人であると同時に多くの夢を持つ人でありました。

## 弱者が強者に勝つための武器

ガンジーの前に立ちはだかる歴史の挑戦は、「弱者が強者に勝てる望みがあるかどうか」ということでした。歴史上、弱者は常に強者に抑圧され滅ぼされてきました。ガンジーは、この避けられない歴史的事実が、真理、正義、愛の法、すなわち神の法を示しているのかと自問しました。ガンジーにとって、神とは真理であり、愛であり、正義だったのです。

彼は大衆に、目を覚まし、立ち上がり、非暴力的に行動するよう呼びかけました。その反応は驚くべきもので、神と人間に対するガンジーの信仰の正しさを証明するものでした。彼に従う人々は、非暴力運動に勇敢に参画していったのです。南アフリカでの叙事詩的な闘争などは、現在では歴史の一部になっております。

トルストイは、はるか遠くのロシアで、南アフリカでのガンジーの運動を知り、全世界においてこれから永続的に続く新しい力の台頭として、これを認めました。これはまさに、「物理的に劣った弱者が強者に勝つことができる武器」の発見だったのです。

お互いを壊滅させてしまう程の威力をもつ核兵器が存在するなかで、ガンジーの非暴力主義は、世界史の現状に新展開をもたらすことになりました。物を持たない弱者が強者に対して、もはや無力なままでいる必要はなくなったのです。

暴力の支配する世界に、ガンジーは非暴力のメッセージをもたらしました。「真実の非暴力は、最強の力とされるものに勝る力をもっている」と彼は述べております。ガンジーは「非暴力こそ人類の法であり、野蛮な力に優越するものだ」とじました。非暴力は、万人に対する友好を意味し、愛と自己犠牲の精神に基づいた、理性的でダイナミックな行動なのです。彼は、革命やテロリズムや過激な運動は物事を変革することに役立たないと信じていました。自らが苦しみを引き受けることを通した説得こそが、悪と戦う最良の方法だとガンジーは信じていたのです。





我々のほとんどが驚嘆するのは、ガンジーがなしえた大衆の統率です。英国の大部隊もなしえないことを、この、か細い人物が驚くほど容易にやってのけたのです。いかに彼の思想が大衆に浸透していたかがわかります。

## 「理想の後継は、私たちの義務」

インディアン・エクスプレス誌の編集者として、ラマチャンドランはインド総督を厳しい言葉で批判し、後に、大臣にまでなりました。一九四七年に、ラマチャンドラン夫妻はガンジーグラムに施設を作りました。今日、ガンジーグラムにはルーラル大学があり、家族計画の施設と大きな病院施設があります。彼は副総長に就任しましたが、支払われる給与の七分の一しか受け取りませんでした。

ラマチャンドラン博士は、人生最後の日々まで、常に行動的でダイナミックでした。彼はいつも他者の幸福に心をくだいておりました。この偉大なる魂は、亡くなっても我々とともにあり、全ての人々に愛情を注ぎ続ける存在であります。彼は一九九五年一月十七日に、行動と他者の幸福への献身の生涯を閉じました。

私は、ガンジーが生きていた時代に属する世代ではありません。その私たちにとって、ラマチャンドラン博士は、偉大なるマハトマの「生きたシンボル」であり、我々にとって常に刺激的な存在でありました。九十一歳で博士は亡くなりました。今日でも、彼がこの世を去った後の空白を感じることがあります。彼の死去で味わった辛さは、言葉に尽くせないものがあります。

ラマチャンドラン博士の理想と信条を、世界の平和と非暴力の実現のために役立てていく――その責任を引き継ぐことは我々の義務であると、私は感じています。その義務を果たしていくことで、次の世代により良い社会を与えることができるのです。ラマチャンドラン博士の理想を次世代に引き継いでいくことができれば、亡くなった博士も喜ばれるに違いありません。

マハトマ・ガンジーからラマチャンドラン博士が受け継いだものは、「慎ましい生活」と「高貴なる思想」

でした。博士は、ガンジーの信条を普及し実現することに生涯を費やしました。そして博士の正統な後継者は、その遺志を継いだマイティリ氏であります。民衆福祉財団の将来は、彼女がいることでさらに発展していくと確信しています。

インドと日本には輝かしい財産があります。それは、〝平和と非暴力による国家・社会の共生〟という理想を共有していることです。ガンジーとラマチャンドラン博士、そして池田SGI会長の理想は、国家間の紛争や宗教の名のもとでの争いといった「暴力の連鎖」にとらわれる現代世界に対して、意味を持ち続けるでしょう。我々には、協力できる共通の基盤があるのです。

私は願います。この世界を、我々が、そして後世の全ての人が幸福で平和に暮らせる場所へと変えていくために、皆さまとともに戦っていきたいと。

（V・S・ハリーンドラナーツ／ラマチャンドラン民衆福祉財団理事）

（訳・たいら　すなお／東洋哲学研究所研究員）